

朝鮮半島に住む民衆のアイデンティティを抹殺した結果、独立後も自主的に統一することができなかったからである。しかし韓国の民衆の中には「日本は朝鮮半島の統一を本当に望んでいるのか」と疑問に思う人が多い。まず日本はこれを払拭しなければならない。このことは戦後責任と通ずるものである。

北朝鮮に対する戦後処理を日韓で行った「経済協力方式」で決着づけようとする動きがある。しかし韓国では日韓基本条約には「反省」の文字がないこと、「力で押し切られた経済協力方式」であることなどから、条約を再検討して改正すべきであると主張している人が増えている。北朝鮮との条約では謝罪と補償の精神を盛り込まなければならない。北朝鮮とは金銭的なことにおいては大胆な決断をしてほしい。湾岸戦争の時さえも130億ドル払ったのだから、植民地時代の人的・物的被害への補償としての金額は単純に試算しても見当がつくであろう。

このごろ拉致問題がクローズアップされている。

拉致問題についての日本政府と国民の態度は戦後思いつけてきた「被害者意識」だけである。「加害者意識」とのアンバランスに驚いた。ここにも歴史認識の曖昧さがある。拉致問題について北朝鮮に強く抗議できなかった理由も「過去」を封しておきたからであろう。こういう時期こそ前世紀に起きた不幸な歴史を真摯に振り返ってみることが大事である。

朝鮮半島の統一には日本の役割が大きいことは間違いない。当面は米国の北朝鮮に対する強政策を牽制し、北朝鮮とは国交を樹立して「普通の国」に変化させることが必要である。北朝鮮との貿易においても、多くの特惠を与え経済を復興させなければならない。中長期的には朝鮮半島の統一の必要性を米中口に訴えつづけるべきである。そして朝鮮半島の統一が達成できれば戦後処理としての日本の義務は果たせることになるであろう。

新任教官研究紹介

2002年4月に経済学部に着任し、「健康社会情報論」を担当することになった奥田先生に、研究紹介をして頂きました。



「たががスポーツ、されどスポーツ」

金沢大学経済学部講師
奥田 睦子

私の主な研究領域は、スポーツ文化に関することです。スポーツの文化的な意味について考えてみたいと思ったのは、大学時代に所属したダイビングサ

ークルでの経験が影響しています。それまで競技スポーツ一辺倒であった私にとって、このスポーツとの出会いは私のスポーツ観を揺り動かし、私にスポーツの魅力を改めて教えてくれるものでした。

スキューバダイビングと出会うまで、私は「スポーツとはいったいどんなものを指すのか」という問いに対する答えとして、ルールにのっとってゲームを行い勝敗が決まるもの、まじめに練習に取り組み頑張るもの、そんなイメージをもっていったような気がします。しかし、スキューバダイビングがこの考えを改めさせてくれました。友人とスキューバダイビングの用具を買いに行ったとき、ショップには色とりどりのウエットスーツが並び、また、オリジナ

ルのウエットスーツを着用したい人のために好きな色をカラーオーダーで注文できるようになっていました。私たちは既製のカラーパターンに変更を加えて、それぞれ世界で一着のスーツを注文しました。また、フィン（脚ひれ）やマスク（水中メガネ）、シュノーケル、マリンスーツなど、それぞれウエットスーツの色を中心にカラーコーディネートをして少々派手ないでたちとなりましたが、自己満足をして購入しました。ところで、高校までの体育の授業では、その際に着用する服として学校指定の体操服とスクールカラーを基調にしたジャージなるものがあります。学外では恥ずかしいから着たくないと言っていた代物です。学内であっても、部活動のときには自由なジャージが認められていたので（高校のみ）、部活のときにはほとんどの生徒が自由に選んだジャージを着用していました。スポーツをする上で機能的にほとんどかわらないのに学校ジャージを着用しないのはなぜでしょうか、それは格好悪いからです。スポーツには、身につけるウェアを通じて「おしゃれ」もまた演出できる要素があったのです。「スポーツをするのにチャラチャラするな」などと簡単に言うことができるでしょうか？否だと思えます。いまや、スポーツウェア、スポーツバッグ、スポーツシューズは、運動シーンにのみ使用されるものではなく、その機能性、デザイン性からタウン着としても定着しています。また、スポーツの装いは自己満足だけにとどまらず、それを見ている人に対してメッセージを発することができます。なぜ、野球部はどの学校でも皆坊主頭なのだろうか（今はそうでもないようであるが）？自分はなぜそれをあたり前として受け入れてきたのだろうか？坊主頭に何を読みとってきたのだろうか？今まであたり前に思っていたやりすごしてきたスポーツの一場面に疑問をもつようになりました。学校という切り取られた時空間でスポーツを行ってきた私にとって、スポー

ツのもつ新たなメッセージに気がついた瞬間でもありました。

プールトレーニングも終了し何とか一人で装備も扱えるようになったころ、夏合宿で沖縄の久米島に合宿に行きました。初めて久米島の海を潜った日、私はあることに気がつきました。それは、ダイビングをしているにもかかわらずちっとも海を楽しんでいない自分がいるということです。水深25mから30mぐらいのところには潜るので、陸上とは多少勝手が異なります。水中でむやみに浮いてしまわないために、中性浮力をとるという技術が必要になります。中性浮力がとれている状態とは、息を吸った時に体が浮き、息を吐いたときに体が沈み、息を止めている間は手足をむやみに動かさなくても水中でじっとしていられる状態のことです。一定の水深に達したらタンクからBCジャケットに入れる酸素の量を調整しながらすばやくこの状態をつくるのですが、こうすることでむやみに体を動かさなくても水中で体を平行に保つことができ、酸素の消費を抑えることができるのです。一度中性浮力がとれたならば、後は、移動した場所における水深に合わせて多少の酸素の出し入れをしながら中性浮力を保って海中散歩を楽しむのです。私は中性浮力を上手にとることに必死でした。砂地でキックすると砂を巻き上げて周りのダイバーに迷惑をかけるのでそのようなことがないようにしよう、無駄に酸素を使わないようにしようなどの意識をし、合理的かつ効果的な美しい水中フォームを追求していたのでした。その甲斐あってか、陸にあがったときに「優雅に泳いでたね」と先輩からお褒めの言葉をいただき満足していたのでした。ところが、その晩、ログブック（ダイビング記録を書くノート）を書こうとしたとき、珊瑚も魚影もほとんど記憶にないことに気がつきました。周りの友人のログブックをみると、見た魚の名前、海面に光が差し込む様子、珊瑚礁の絵などが書かれ

ているのです。私のログブックはというと本日のダイビングの反省がぎっしり書かれているのみだったので。一体私は何のためにダイビングをしたのであろうかと自問自答しました。水中での美しいフォームをつくるのは安定した体勢をとることで海中散歩を楽しむためなのです。私は、たぶんだれよりも中性浮力を上手くつくり（実際、タンクに残っていた酸素の量は一番多かった）、見た目にも美しかったのですが、それが楽しむためにいかされていなかったのです。大学の体育教育学の授業の中で、スポーツで行う練習は練習のための練習として行うのではなく、ゲームを楽しむための練習であることが大切であると教わりましたが、まさに私は練習のための練習を行っていたのです。私はいったい誰と競争していたのであろうかとふと思いました。美しい海中を堪能することが目的であり競争相手などいなくても関らず、無意識のうちに合理的かつ効果的なフォームを追求し他者よりも上手に潜ろうとしていたのでした（他人のタンク残量をチェックするあたり、競争意識が頭をもたげていると言わざるを得ません）。それを認められて一人喜んでいたので。三つ子の魂百までもという諺がありますが、高校までに行ってきたスポーツへの取り組み方が抜けきれない自分がそこにはありました。スポーツへの関わり方とは一度体にしみつくと拘束力が非常に強いものであることを身をもって実感した出来事でした。

このような体験は、私の中でのスポーツを「たか

がスポーツ」から「されどスポーツ」へと変え今の研究に大きな影響を与えています。現在私はスポーツのもつ社会的、文化的意味や生涯学習時代における望ましいスポーツへの関わり方などについて研究しています。中でも最近、障害者のスポーツに関心があります。スポーツに関わる人は、五体満足で健康な人だけではありません。まだまだ数は多くないですが障害をもつ人もまた参加しています。スポーツと障害者が結びつく際に生じる様々な諸問題のメカニズムをスポーツのもつ社会的、文化的な意味の観点から明らかにすることで、今まで当たり前になってきたスポーツの有り様について新たな知見が得られるのではないかと期待しながら研究している毎日です。

授業では、次年度から健康社会情報論を担当する予定です。健康問題は、自分自身の自己実現を可能にするための一つの条件であり、個人の問題である一方で、学校や職場において健康診断の受診が毎年行われていることや医療費の削減がしばしば問題になっていることなどから考えると社会的な問題でもあります。少子高齢化社会である現代社会において、健康への配慮や生きがいづくりは、個人レベルを超えてむしろ社会レベルで考えるべき課題であると思います。健康社会情報論では、このような社会性を帯びた健康について、その維持・増進に深いかかわりをもつスポーツと合わせて、その思想や施策などを講義したいと思っています。

編集後記

執筆者のおひとりから、「CURESの読後会」のようなものをしてはどうかとご提案頂きました。発行しっぱなしではなく、発行後議論を発展させたり、その中で新しい課題をみつけたりと、次につなげていけたら素晴らしい！ぜひ、「読後会」実現させたいと思います。（Y）

地域経済ニューズレター第 61 号

2002年12月25日発行

発行/金沢大学経済学部地域経済情報センター
金沢市角間町 (☎920-1192)
☎ (076)264-5438

編集/金沢大学経済学部 地域経済ニューズレター編集委員会
印刷所/金沢市中村町28-14 株 谷 印 刷
☎ 242-7267